



TITLE:

<Book Review>Gullick, J. M.,
Malaya. Frederick A. Praeger Pub.,
N.Y., 1963,pp.256

AUTHOR(S):

棚瀬, 襄爾

CITATION:

棚瀬, 襄爾. <Book Review>Gullick, J. M., Malaya. Frederick A. Praeger Pub., N.Y.,
1963,pp.256. 東南アジア研究 1963, 1(2): 85-85

ISSUE DATE:

1963

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/54813>

RIGHT:

い。

批判はともあれ、マラヤ研究のための大きな業績であることに間違いがない。(本岡武)

Gullick, J. M.: Malaya. Frederick A. Praeger Pub., N.Y.. 1963. pp. 256

本書は Nations of the Modern World 叢書の一冊として出版されたものである。著者ガーリック氏は英国の人、Taunton School 及びケンブリジで教育を受け、ロンドン・スクール・オブ・エコノミックスのレイモンド・フェース及びモーリス・フリードマンなどマラヤに詳しい人類学者の指導も受けている。まず植民地官吏となり、次で今次大戦中軍籍に入ったが、1946 Malayan Civil Service に加って11年間マラヤにあり、マラヤ共産党対策、貿易、農村振興等々に従事した。1957-62 ロンドンでマラヤにゴムのエステイトを持つ人々の Guthrie Group の所長をつとめた。従って純粹の学究活動のみをしているのではないが、Journal of the Royal Asiatic Society 等にも幾篇かの論文を発表している。しかし何よりも注目すべきガーリック氏の論文は Indigeneous Political Systems of Western Malaya, 1958 であって、ロンドン大学経済学部の社会人類学叢書の (Monograph on Social Anthropology) 一冊として出版されている。西部マラヤの村落構造から支配階級、サルタン等に至るまで、その政治的社会的構造を明らかにしたもので、ガーリック氏の学的名声を決定したものと言うことができ、マラヤの社会構造の研究者にとって不可欠の文献と認められている。

マラヤは周知のようにマライ人、中国人、インド人からなる複数社会であり、殊に20世紀に入ってから人口的にも経済的にも著しい発展をとげた。その原因は主としてゴム栽培の導入、錫鉱の開発及び国際貿易港としてのシンガポールの機能によっている。こういう複数的な社会をかかえながら、戦後には独立を獲得し、更には北ボルネオ、サラワクを含めてマライシア聯邦へと発展し、経済的にも安定した国民として形成されて行く姿は東南アジアの国としては驚くべき現象であると言える。ガーリック氏は本書でこの過程に対して統一的な説明を与えようとしているのであって、氏が直接政治や経済にたずさわっていた人であるだけにその説くところにあおなげがない。

本書の半ばを占めるのはマラヤの歴史であって、

1400から1511までのマラッカ王国の歴史にはじまって、現代に及び、これに11章をついやしている。以後の諸章は政治、経済、農村振興、教育、新指導者などを取扱っているが、新聞記事、各種のリポート類がよく利用されている。

本号に紹介されているシンガポール大学の Ooi Jin-Bee の著書がより多く地理的であるに対して、本書はより歴史的、文化的であるが、共にマラヤの現状を理解するために不可欠の文献と思われる。但し1958の「西部マラヤの土着政治組織」の方が学問的香気に於ては遙かに高いように思われる。(棚瀬襄爾)

Newell, William H.: Treacherous River, A Study of Rural Chinese in North Malaya. Univ. of Malaya Press. 1962. pp. xxv + 233

Treacherous River とはマラヤの Province Wellesley の中央部にある川で現在 Sungei Pertama として知られている。本書はその川に沿う潮僑コミュニティの調査報告である。しかし単なるモノグラフではなく、彼らの出身地である広東省の北東部における中国村落やマラヤの他の華僑社会(とくにシンガポールの都市住民や広東人のコミュニティ)との比較を行なって、この報告をより価値あらしめるものとしている。内容は、家族構造、宗教、結社、共同労働、紛争等、極めて社会学的な問題に重点が置かれている。

(1) 調査地が潮僑のコミュニティであること。これは、村人の(少くとも古い世代の)関心が常に中国に向っていることを意味し、又、マラヤにおける華僑一般の農村生活の典型とはなりえないことも示す(方言・出身地・環境・政府の干渉の度合・住民の伝統的価値への志向度などによって同じ中国人コミュニティでも種々のバラエティが生じる)。(2) 一方の方言が他方に通じないということはあっても、中国人社会の一部であるという意識は強い。隣接のマレー人との社会的経済的な接触は殆んどなく、生活様式・宗教などもマレー人から影響を受けることは殆んどない。

(3) 中国に於けると同程度の強固な同族結合や、(経済的単位としての)世帯と村とが密接に結びつくというようなことが予想されるが、実際には、この基本的な結合関係が欠如している(この村の潮僑は、専ら野菜作りを主とし、養豚・養鶏をもして生活している。労働